



Title	『はいずみ』覚書
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大學文學部紀要, 46(3), 85-109
Issue Date	1998-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33707
Type	bulletin (article)
File Information	46(3)_PR85-109.pdf



[Instructions for use](#)

『はいずみ』覚書

後 藤 康 文

本稿は、『堤中納言物語』所収の一篇『はいずみ』をとりあげて、従来の注釈書の不備や誤り等をいくつか指摘し、いささかの卑見を述べることを目的とするものである。

『堤中納言物語』の本文は、高松宮家蔵本（池田利夫解題、復刻日本古典文学館）、宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本（池田利夫解説、笠間書院）、広島大学蔵浅野家旧蔵本（塚原鉄雄解説、武蔵野書院）、穂久邇文庫蔵久邇宮旧蔵本（久曾神昇解題、汲古書院）、吉田幸一氏蔵平瀬家旧蔵本（吉田幸一解題、古典文庫）、桃園文庫蔵島原本（寺本直彦解題、東海大学出版会）、桃園文庫蔵榊原本（同上）、三手文庫蔵今井似閑自筆本（塚原鉄雄・神尾暢子校注、新典社）の八本を参照し、適当と思われるかたちで引用した（頁・行数の表示については、とりあえず最後にあげた新典社本のもの掲げたが、特別な意味はない）。

また、今回参照あるいは引用した『堤中納言物語』の注釈書その他と稿中における略称は以下のとおり。

・久松潜一『校註堤中納言物語』（明治書院、昭三）……………『校註』

- ・清水泰 『増訂堤中納言物語評釈』 (立命館出版部、昭九)……………『評釈』
- ・佐伯梅友 『新註国文学叢書・堤中納言物語』 (講談社、昭二四)……………『新註』
- ・松村誠一 『日本古典全書・堤中納言物語』 (朝日新聞社、昭二六)……………『全書』
- ・吉沢義則監修 『堤中納言物語新講』 (藤谷崇文館、昭二七)……………『新講』
- ・上田年夫 『堤中納言物語新釈』 (白楊社、昭二九)……………『新釈』
- ・佐伯梅友・藤森朋夫 『堤中納言物語新釈』 (明治書院、昭三一)……………『新釈』
- ・寺本直彦 『日本古典文学大系・堤中納言物語』 (岩波書店、昭三二)……………『大系』
- ・山岸徳平 『堤中納言物語全註解』 (有精堂、昭三七)……………『全註解』
- ・松尾聡 『堤中納言物語全釈』 (笠間書院、昭四六)……………『全釈』
- ・稲賀敬二 『日本古典文学全集・堤中納言物語』 (小学館、昭四七)……………『全集』
- ・土岐武治 『堤中納言物語の注釈的研究』 (風間書房、昭五一)……………『注釈的研究』
- ・池田利夫 『旺文社文庫・現代語訳対照堤中納言物語』 (旺文社、昭五四)……………『対照』
- ・三角洋一 『講談社学術文庫・堤中納言物語全訳注』 (講談社、昭五六)……………『全訳注』
- ・塚原鉄雄 『新潮日本古典集成・堤中納言物語』 (新潮社、昭五八)……………『集成』
- ・稲賀敬二 『完訳日本の古典・堤中納言物語』 (小学館、昭六二)……………『完訳』
- ・大槻修 『新日本古典文学大系・堤中納言物語』 (岩波書店、平四)……………『新大系』
- ・土岐武治 『堤中納言物語・校本及び総索引』 (風間書房、昭四五)……………『校本』

なお、各種散文文献の引用は各々所掲の書物に基づいたが、いずれも漢字・仮名づかい等の表記を適宜改めてある。

一

妻などもなき人の、せちにいひしにあはすべきものを、かく本意にもあらでおはしそめてしを、口惜しけれど、いふかひなければ、かくてあらせ奉るを、世の人々は、妻据ゑ給へる人を、思ふと、さいふとも、家に据ゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ、などいふもやすからず。げに、さることに侍る。(P11L8~P12L8)

娘のしかるべき処遇を求めて、主人公の「男」に詰め寄る「今の人の親」のことは。考えてみたいのは、傍線を付した箇所¹の処理のしかたである。このことについてはたとえば、『全釈』が、

○「人もあろうに妻を家に据えていらつしやる方を(婿におとりになるなんてどういうつもりかしら。)新しい妻を思うとそうはいっても、家にある妻をこそ大事に思うでしょう」の意か。「め据ゑ給へる人を思ふ」と、『さいふとも……あらめ』など「云々」のように切つて「妻を家においていらつしやる人に(あなたの娘さんは)心をよせている」と言い、又、『そうはいっても、家においてある女をこそ……』など「云々」と解する考えもある。前の解は「思ふとさいふとも」がきこえないが、後の解も今の女が、男を「思」っている(愛している)と「世の人人」が判断しているのも行きすぎの感じがするので、しばらく前の解に従う。(注)

と述べるように、いちおうふたとおりの解き方が可能なだけけれども、そのどちらにも難点が残る。要は、はじめの「思ふ」の主語を「男」ととるか、「今の人」（またはその親）ととるかの相違であつて、直前の助詞「を」とのつながりの自然さからいえば「後の解」の方に分があるが、逆に、文脈から判断すれば、「思ふ」と「いふ」のはやはり「男」の言動でなければならず、またそうでないならばつづく「思ふにこそあらめ」との一貫性も保たれない。したがつて、「全釈」のいう「後の解」を採るのは、実際には「評釈」や「全書」といった初期の注釈書の一部に限られ、そのほかの諸注はいちように、

○妻をちゃんと持つておられる人だのに（婿にしても仕方あるまい）。「むすめさんを深く思う」と、そう口で言つても家においている妻をこそ大事に思うのであろう。
（『大系』・頭注）

○それを世間の人々は『れつきとした奥さんを家に置いていらつしやる人なのに。新しい女を大事に思うと、口先ばかりそう言つても、家にちゃんと置いている奥さんのほうを大事に思っているのだから』など噂するのを耳にするると気がもめる。
（『全集』・口語訳）

○世間の人たちは、『奥さんを（家に）ちゃんと置いていらつしやる人を（通わせてどういうつもりか）。（娘さんを）思うとそう（男が）言つても、家にきちんと置いてある女をこそ、大事に思うでありますよう』などと言つてついても安心していられません。
（『対照』・現代語訳）

のごとく、「前の解」すなわち「妻据ゑ給へる人を」から世間の風評と捉えるとともに、ここでいったん句点を打つて下に省略を想定する措置を選んでいる。おそらく、基本的な理解としてはこれでよいのだろう。ただ、少々気にかかるとは、こうした処理にしたがうと、「世の人々」のことばの中で「妻据ゑ給へる人」と、この一箇所のみ「男」に対する尊敬語が用いられるかっこうになる点である。これは「後の解」を採った場合にも同じくいえることなのだが、いささか疑問に思わざるをえない。

そこで案じた一計はというと、「妻据ゑ給へる人を」までを「今の人の親」のことば、「思ふと」以下「あらめ」までを世人の噂の引用と把握して、本文を、

◎世の人々は、妻据ゑ給へる人を、「『思ふ』と、さいふとも、家に据ゑたる人こそ、やごとなく思ふにあらめ」などいふもやすからず。

と処理するアイデアで、その大意は、

◎世間の人々は、(あなたののように、すでに)奥さんを家に住まわせていらつしやる方のことを、「(新しい女性を)愛している」と、たとえそのように(当座は)いつていても、(結局は、もとから)同居している妻の方を大事に思うだろう」などと評するのも心穏やかではありません。

となる。この考え方にしたがえば、少なくとも当該部分における敬語使用の不統一は解消されると思うのだが、はたして一理ありやなしや。自信はないけれども、しばらく一案として提起しておく。

二

「心ざしばかりは交らねど、親にも知らせて、かやうにまかりそめてしかば、いとほしさに通ひ侍るを、『つらしとおぼすらむかし』と思へば、①『何とせしわざぞ』と、今なむくやしければ、今もえかき絶ゆまじくなむ。かしこに、『土犯すべきを、ここに渡せ』となむいふを、いかがおぼす。『ほかへや往なむ』とおぼす。何かは苦しからむ、かくながら端つ方におはせよかし。忍びてたちまちに、いづちかおはせむ』などいへば、女、『ここに迎へむ』とていふなめり。②これは親などあれば、ここに住まずともありなむかし。年ごろ行く方もなしと見る見るかくいふよ」と、「心憂し』と思へど、つれなくいらふ。』さるべきことにこそ。はや渡し給へ。いづちもいづちも往なむ。③今までかくてつれなく、憂き世を知らぬけしきこそ」といふ。
(P14L7〜P17L1)

売りことばに買いことばで、「今の人」を自邸に引き取らざるをえなくなった「男」は、「本の人」の反応を見るべく土忌みにかこつけて話を切り出す。ここでは、問題を三つ設定してみた。傍線部①は解釈と本文の、②は本文の、③は解釈の問題である。

まずは傍線部①であるが、この部分の解釈については、

○『一体どうしたことなのだ。』と、今こそ後悔するので、今も〔あなたとの関係は〕絶えることはできそうにもありませんよ。
〔全訳〕・訳

○(私としたことが)どうした所業かと、今では後悔していますので、現在も〔あなたと〕縁は切れそうにありません。
〔対照〕・現代語訳

のごとく、「今なむくやしければ」と「今もえかき絶ゆまじくなむ」とのつながりを順接と捉え、「本の人」すなわちアナタとの関係を断ち切れないと解する立場(A)、

○どうした事ぞと、今では悔んでゐるのですけれど、もうどうにもならなくなつてしまつたのです。

〔新講〕・通解

○なんでこんなことをしてかしたのかと、今になって後悔していますが、今すぐにも縁を切るわけにはいかなくてね。
〔全訳注〕・現代語訳

のように、「今なむくやしければ」と「今もえかき絶ゆまじくなむ」とのつながりを事実上逆接と捉え、「今の人」との関係断ち切れないと解する立場(B)、

○なんであんな事をしたことだと、今こそ悔しいので(縁を切りたく思うが、しかし)今でも縁を切るわけにもま

いりません。

(『大系』・頭注)

○(私は、自分ながら今更) どうしてそんな事を、しでかした事であるのかと、如何にも、今となっては、悔しいのですから。(この辺で、縁を切つ^つてまいりたいようにも、思うのですけれど) 今では、(もはや)縁がすつぱりと、切れそうもないと、どうしても思うのです。

(『全註解』・口訳)

○なぜこんなことになったのかと、今更後悔の念切で。でも今も相手と手を切ることはできそうもなくて。

(『全集』・口語訳)

のように、「今なむくやしければ」じたいはあくまで順接と考えるものの、つづく「今もえかき絶ゆまじくなむ」との間に文脈上の断絶を認め、その間に逆接接続を含んだ補足措置を施すことで、「今の人」との関係を断ち切れないと解する立場(C)、さらには、「くやしければ」の「ば」を「ど」に改めて、

○なぜそんな女に通い始めたのかと今では後悔してゐるが、まだきつぱりと縁を切る事ができない。

(『全書』・頭註)

○何てことをしたんだろうと、今更後悔はするんだが、今でも切れるわけにはいかないのです。

(上田『新釈』・通解)

などと解釈する立場(D)、の四つがある。

要するに、接続助詞「ば」に対する対処の相違がこうした現状を将来したといえるわけだが、四説のうち「ば」をいちばん素直に受け入れるA説には、まず成り立つ見込みがないと断じてよからう。「男」が手を切れないといつてゐる相手が、前後の文脈から考えて「今の人」以外でありえないことはあまりに明白だからだ。ここはやはり、新しい女との関係を後悔はしている、が、いまだに終止符を打てないという脈絡でなければならぬのである。にもかかわらず、あえてA説を採った『全釈』の見解（思考過程）は、ちなみに次のようなものであった。

○「くやしければ」は下文とのつながりが悪く、あるいは「くやしけれど」の誤かもしれないが、諸本はみな「ば」である。あるいは「ば」はそのままでよく、むしろ「くやしければ」か「えかき絶ゆまじ」かの下に脱落があるものであろうか。山岸氏は「くやしければ」で切り、下に「縁を切りたくはあるが」を補って解かれ、従つて「かき絶ゆ」を「今の女と縁を切る」意とされるが、「くやしければ」の本文に添って考えれば「今こそ後悔しますので、今後も（あなたとの関係は）絶えることはできそうにもありませんよ」の意ととる方が自然であろう。

（注）

さて、ついで脱落するのが『全釈』のいう「山岸氏」説、すなわちC説であることに異論の余地はあるまい。『全註解』は、

○「今なむ悔しければ。」を「……悔しけれど」歎とする本もあるが、従わない。対話の文であるから、このまま「……

悔しければ」でよい。この下に「……縁を切りたくはあるが」などの心を含めてあるものである。(考異)

と説くが、これはまったくの強弁だ。それがいかに「対話の文」だからといって、このようなムリが通るはずもない。「ば」はそのまま下にかかつてゆくのみならず、いうまでもなく正常な判断なのである。となれば、残るのはB・Dの両説ということになるが、最後に消去されるべきはB説であろう。『全訳注』は自説の根拠について、「いま、この「ば」を「ど」の意味ととった」と説明しているのだけれども(注)、実はそこがきわめて危うい。なぜならば、接続助詞「ば」が逆接の確定条件を表すとされる、つまり「ど」と同義に解しうるのはせいぜい、

・ 霜雪もいまだ過ぎね者思はぬに春日の里に梅の花見つ

(『万葉集』八―1434・大伴三林)

・ 秋立ちていく日もあらね者この寝ぬる朝明の風は手寒しも

(同―1555・安貴王)

・ わが宿の萩の下葉は秋風もいまだ吹かね者かくそもみてる

(同―1628・大伴家持)

・ 天河浅瀬白波たどりつつ渡りはてねば明けぞしにける

(『古今集』秋上―177・紀友則)

といった例のごとく、打消の助動詞「ず」の已然形に接続して「〜ねば」のかたちをとるケースに限定されるはずだからだ(これらの「ば」についてさえ、あくまで順接で解く立場もある)。「今なむくやしければ」の「ば」は、それが真正正銘の「ば」であるかぎり、A説のように「〜ので」と訳すほかはないであろう。よく意味上「ど」に等しい「ば」の用法があるかのようにいわれるが、それは今述べた特定のパターンについてのみほぼ当てはまることであって、

それ以外の「ど」と思われる「ば」に関しては、むしろ「止」と「者」の字体相似による誤写を疑うべきではないのか。ということでは、ずいぶんと遠回りをしたけれど、本稿の結論としては、諸本「ば」とある（『校本』）ところを「ど」に改訂するD説を正解としておきたいと思う。

次の傍線部②については、やや抵抗を覚える程度なので簡単に済ませよう。要は、「これ」は「かれ」の誤りではないか、ということだ。今ここで話題になっている人物を指す用法と考えるならそのままでもよさそうに思えるが、この作品においては、舞台が「男」の家にある時には「今の人」の家が「かしこ」と、また、逆の場合は「男」の家すなわち「本の人」の居所が「かしこ」と呼び分けられているわけだし、「今の人」の家にいる「男」が「本の人」の将来を思いやる場面では、「あはれ、かれもいづちやらまし」とあり（P13L6〜7）、また、「本の人」が「男」の家を出る決意を固めるせりふには、「かの大原のいまこが家へ行かむ。かれよりほかに知りたる人なし」（P18L1〜3）とあった。こうした点を踏まえるならば、「男」の家に住む「本の人」の思惟の中で、「今の人」を指して近称の「これ」が用いられるのはいささか不審ではあるまいか。現代語に置き換えて説明すると、ここは「あの人には両親がいるのだから、何もここに住まなくても」云々といった文章であることが望ましいのだから、「これ」ではなくて「かれ」とあるのがやはりベターだろう。いうまでもなく「己」と「可」は実に紛れやすい字体同志であり、実際に「これ」と「かれ」、「この」と「かの」との交替はしばしば起こる現象だったといつてよいのだから、今はあえて「かれ」への改訂説を主張しておきたい。参考までに、諸注の訳文をみてみると、

○あの人は親もあるのだから、こゝへ来なければならぬことはない。

（『評釈』・通釈）

○あの人は親なんかもあるのだから、この家に住まなくてもよいだろうに。

(佐伯・藤森『新釈』・通釈)

○あの女は親などもあるんだから、ここに住まなくても何とかなろうに。

(『全集』・口語訳)

○あちらは親がいて娘と婿の世話をしているのだから、ここに住まなくても不自由しないだろうに。

(『全訳注』・現代語訳)

などとしているものも少なくない。

おしまいに、傍線部③をめぐって。この部分の解釈については従来、

○今までかうして平気で浮世も知らぬ様で過ごさせていたゞいたのは、有りがたう御座います。

(『評釈』・通釈)

○いままでこんなにして平気で浮世も知らぬ様子で過ごして来たのは幸福でした。

(『全書』・頭註)

○今までこうして変わったこともなく、浮世のつらさも知らぬ顔にすごせたのは、ほんとにありがたいことでしたわ。

(上田『新釈』・通釈)

○(私が)、今日までこんな風にして、何の変わりもなく平穏で、つらい夫婦の関係も知らないで居る有りさまこそ、

(全く御身の御蔭でありました。)

(『全註解』・口訳)

○今までこうして平気で、つらい世の中を知らぬありさまだったことこそ(本来ありうべからざる、しあわせすぎる)ことだったのです。

(『全訳』・訳)

というように、「こそ」の下に「男」に対する感謝の念を読みとる考え方が支配的であるが、これとは別に、

○今までこうしてそ知らぬ顔で、面倒な男女のトラブルも知らぬげに過ごしてきたのがお恥ずかしい

(『全集』・口語訳)

○今まであなた一人で悩んでいらつしやるのに気づかず、世に住む憂さを知らぬげにいた私が恥ずかしい

(『全訳注』・現代語訳)

のごとく、「こそ」の下に「本の人」自身の慚愧の念を読みとる異説もあつて、おおきく二極に分裂しているとみてよさそうだ。いわば〈感謝〉説と〈慚愧〉説の対立なのだが、残念ながら二者択一とはゆかず、そこには共通の、しかも致命的な欠陥があるといわざるをえない。すなわち、「憂き世も知らぬけしきこそ」の「けしき」の解釈に問題があるので。「けしき」とはあくまで、認識主体の客観的な観察によつて捉えられた他者または自然界の様子を指すことばであつて、両説のごとく、これを「本の人」自身の状態や態度に関わる語と解くことはそもそも許されないからである。このことは、たとえば、

・同じさまにうち具し聞え給ひて参り給はましかば、何ごとも心よりほかなるさまにて、心憂く恥づかしきありさまも、もて隠され奉らましを、何ごに思ひなぐさめてかは、憂きを知らぬさまにて、恥に死にせぬ身をながらへむ。

(『狭衣物語』卷二／日本古典全書―上・P329)

・世を厭ふ心はほど経侍りぬれど、誰もかうのみ、たはぶれごとをさへいまいまじきものにおぼしのたまはずれば、心よりほかならむ命だにかけとどめまほしく思ひつつ、「憂きを知らぬさまにて」とのみ忍び過ぐし侍るを、げにこそあまた年も積り侍りぬれ。

(同卷三／同一下・P141)

などの例に照らすだけでも明らかだといえよう。もし「本の人」が、それまでの自己の生活あるいは態度を省みて、「男」に対する感謝あるいは慚愧の思いを言外に表明したのだとすれば、その場合は、「けしき」ではなく、「さま」ないしは「身」といった別の語が用いられたはずなのである。

ならば、どうするか。はなはだ遺憾ではあるが、今のところこれといった解決案はない。ただし、可能性としてはいちおうふたつの考え方ができるかと思う。ひとつは、「けしき」をその語義に忠実に「男」の様子と解し、傍線部③を(今回のことでは深刻にお悩みだったでしょうに)今までこうして(私に対しては)何ごともなかったかのように(ふるまわれ)、世間の辛苦など感じていないような(あなたの)様子こそが(かえって水くさく思われます)」とでも解釈する道。もうひとつは、「憂き世も知らぬけしきこそ」がちょうど七音十五音である点に着目して、何らかの引歌を想定する道である。が、前者についていえば、かりにそのように解く場合の本文は、「知らぬ」ではなく「知り給はぬ」または「けしき」ではなく「御けしき」の、どちらかの尊敬形をとるべきであろうし、後者についていえば、それと特定するにふさわしい歌をいまだに見いださないでいる。ゆえに、この箇所はなお懸案とせざるをえないが、ともあれ、上に指摘した「けしき」の語義の件だけは少なくとも今後再考の必要があろう。

ここなる人のわづらひければ、折あしかるべし。あやしかるべし。このほどを過ごして迎へ奉らむ。

(P32L7~P33L1)

「本の人」の美質にあらためて魅せられた「男」は、彼女を大原の里から連れ戻したあと、今後決してあちらへは行かないと誓う。そこで、「今の人」を迎える翌日の予定を何としてもキャンセルしなければならぬ。これはそのためにでつちあげられた口実なのだが、問題は傍線部「あやしかるべし」にある。諸注はいつたい、この部分をどのように解釈しているのだろうか。いちおう、それを確かめておこう。

○わづらっているために汚なくもあり、いろ／＼取りこんでいてすべてが見すばらしくもなることをいう。

(『全集』・注)

○男の家に移ってくる時受入れ側に病人がいるというのは不吉だ。一説に、病人がいて見苦しいし、取り込んでいるからとする。

(『全集』・頭注)

○見苦しうございませうからの意。あやしかりは、賤しかりで、見苦しい、粗末だなどの意。

(『注釈的研究』・語釈)

○病人がいて他へ移せない所へやってくるというのは異例で、理解を超えたことの意味としたが、病人がいることでけがれており、取りこんで、賤しいのと同じ状態になっていることを意味する、とも考えられる。

(『対照』・脚注)

○そのような折においてになっても、変なことでしょう。

(『新大系』・脚注)

だが、よく考えてみてほしい。「あやしかるべし」をどのようなニュアンスで受けとめようとも、それらは直前の「折あしかるべし」にすでに包含されている事柄なのであって、この表現は、いつてみれば蛇足以外の何ものでもないわけだ。それだけならまだしも、「あしかるべし」につづけての「あやしかるべし」である。これはきわめて「あやし」い。早い話が、衍文ではないのか。つまり、元来は「折あしかるべし」とだけ書かれていたものが、ある段階でまずは「折あやしかるべし」に変化した。その後某書写者が「あやしかるべし」の横に「あしかるべし歟」といったたぐいの注記を加えた。これを受けてさらにのちの書写者が「折あやしかるべし」を「折あしかるべし」に訂正したものの、同時に「あやしかるべし」をも保存してしまったために、現在われわれの前にあるかたちの本文「折あしかるべし。あやしかるべし」が生まれたのではないかと、そう推定されるのである。「男」の口実は、

◎ここなる人のわづらひければ、折あしかるべし。このほどを過ごして迎へ奉らむ。

でじゅうぶんだったはずであり、むしろこの方がすつきりする。

これだけではしかし、例によって胡散臭いことをと、苦虫を噛み潰したような顔をされるばかりか、まったく無視されるおそれさえあるので、そこはひとつムシの縁、『虫めづる姫君』にも似たようなケースがあることを紹介しておこう。姫君が男の童たちに「虫の名」をつけたという、あの場面である。

わらはべの名は、「例のやうなるはわびし」とて、虫の名をなむつけ給ひたりける。けら男、ひき鷹、いなかたち、いなこまろ、あま彦、などなむつけて、召し使ひ給ひける。
(P76L5〜P77L1)

虫の名を擬人化しての命名だが、従来「いなかたち」についてのみ諸説はあるものの「未詳」であった。それもそのはずで、これは、次の「いなこまろ(＝いなご鷹)」より派生した非本来的本文だったのである。当面の「あやしかるべし」とは順序が逆転するけれども、はじめ「いなこまろ(已万呂)」とあったものが「いなかたち(可多知)」に誤写され、ついで「いなかたち」に「いかこまろ歟」等の傍記が施された。そして、「いなかたち」が抹消されずにそのまま残った結果、傍線部「いなかたち、いなこまろ」のごとき本文ができあかったというわけだ。ちなみに、引用箇所のもとのかたちを示せば、

◎わらはべの名は、「例のやうなるはわびし」とて、虫の名をなむつけ給ひたりける。けら男、ひき鷹、いなご鷹、あま彦、などなむつけて、召し使ひ給ひける。

となる。このことじたいは、拙稿「虫めづる姫君」復元」(『宮崎大学教育学部紀要・人文科学』第七十一号、平四・三)においてすでに述べたところだが、今の問題を考えるうえでたいへん参考になる事例だといえるだろう。なお『校本』によれば、土岐氏のいう第二門第三類第二種本のほとんど(狩野文庫本・函碕文庫旧蔵本・静嘉堂文庫蔵嘉永本)と同四種本のすべて(小山多乎理旧蔵本・多和文庫蔵本・岸本由豆流自筆本・旧群馬師範学校本)において、「あやしかるべし」がないことを付言しておく(P108~9)。

四

この男、いとひききりなりける心にて、「あからさまに」とて、今の人のもとに、昼間に入り来るを見て、女、①「にはかに殿おはすや」といへば、うちとけてゐたりけるほどに、心さわぎて、「いづら、いづこにぞ」といひて、櫛の箱を取り寄せて、白きものをつくろと思ひたれば、取りたがへて、掃墨入りたる畳紙を取り出でて、鏡も見ずうちさうぞきて、女は「『そこにてしばし。な入り給ひそ』といへ」とて、是非も知らず、②きしつくるほどに、男、「いととくもうとみ給ふかな」とて、簾をかき上げて入りぬれば、畳紙を隠して、おろおろにならして、うち口おほひて、ゆふまくれにしたてたりと思ひて、まだらにおよび形につけて、目のきろきろとしてまたたきゐたり。

(P333L4~P335L5)

『はいずみ』は、『堤中納言物語』諸篇の中でも本文の損傷度が低く比較的読みやすい作品だと思われるけれども、この後段冒頭部だけは話がちがう。本文の問題も含めて注釈上の難題が集中している感がある。極めつけは「ゆふまくれにしたてたり」で、ここは今のところお手上げ状態だが、ほかにも大小疑問を禁じえない箇所が少なくない。本稿では、そうした中からひとまず右の二箇所をのぞいて、現時点での意見を述べておきたいと思う。

最初に傍線部①。これが「女」「今の人」ではなく侍女のことばである点は動かないが、「おはすや」の「や」がどうもよくわからない。諸注は「や」は感動助詞（『全釈』・注）、「やは、終助詞で、感動の意を示す」（『注釈的研究』・語釈）などと解して特に気にとめている様子もないのだけれども、ほんとうにそれでよいのだろうか。というのも、発話中の動詞終止形に接続する終助詞「や」が詠嘆（「感動」と表現するのは必ずしも適当ではない）の用法となるのは、たとえば、

・「かたちありや」「をかしや」など、若き御達の消えかへり心移す中少将、何くれの殿上人やうの人

（『源氏物語』行幸卷／日本古典文学全集—(3)・P283）

・「かう少しものおほゆる隙に渡らせ給ふべう聞えよ。そなたへ参り来べけれど、動きすべうもあらでなむ。

見奉らで久しうなりぬる心地すや」と、涙を浮けてのたまふ。

（同夕霧卷／同—(4)・P407）

・「物の怪のしわざなりければ、かへり侍りてしばしありて例ざまにはなり給へど、なほいと頼もしげなくなん。

むつかしう侍りや。心やすくは、かくて」と、うちなげきて

（『夜の寝覚』卷四／日本古典文学大系・P288～9）

『はいずみ』覚書

・さるべきとはいひながら、思ひたがふ心も出でまうでくる、たが心もやすげなう、あぢきなく侍りや。

(同卷五／同・P343)

・(上略) さすがなるさかしら心の、際高くさいまくれたるやうなる、かへりてはうたてありや」など、この御ありさまを尽きせずいみじとおほいて

(『浜松中納言物語』卷二／日本古典文学大系・P221)

・「罪の深きに侍らむ、つねよりものあはれに侍りや。けさは、乱れ心地も悩ましう侍るを、渡らせ給ひね」とて、例の御方に入り給へば、人々おどろきさわぐ。

(同卷三／同・P296)

といったケース、すなわち、話者自身の内面に沸き起こったさまざまな感情を表出する場合に限られると思われるからである。ところが、傍線部①はそうではない。それが「にはかに〽おはすや」のかたちであつてみれば、同じく発話内の動詞終止形＋終助詞「や」の形式を踏む次のようなケースと、むしろ同質だと考えねばならないはずだ。

・「女〽出で立つや」とのたまひて、姫君のいとうつくしげにつくろひ立てておはするを、うち笑みて見奉り給ふ。

(『源氏物語』葵卷／日本古典文学全集―(2)・P21)

・この女の、手を打ちて、「あがおもとにこそおはしましけれ。あなうれしともうれし。いづくより参り給ひたるぞ。

①はおはしますや」と、いとおどろおどろしく泣く。

(同玉鬘卷／同―(3)・P102)

・「まづおとどはおはすや。若君はいかがなり給ひにし。あてきと聞えしは」とて、君の御ことはいひ出でず。

(同／同)

・「御衣どものことなど、後見聞ゆる人は侍りや。(中略)」と聞え給へば (同初音卷／同一(3)・P148)

・「さて、かかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。(中略)」と、さし寄りて聞え給へば

(同螢卷／同一(3)・P205)

・「年ごろ、人づてにのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、うれしき折かな。しばし、少し立ち隠れて聞くべきもののくまありや。(中略)」とのたまふ。
(同橋姫卷／同一(5)・P130)

・こりずまなれど、もののついでに、なほえ忍びはてず、「内より立ち返り御消息はありや」と問ひ出で給ひたるに、

「さればよ、例の」とうるさければ
(『夜の寢覚』卷五／日本古典文学大系・P401)

・「さて、その刃かりけむ人は侍りや」とのたまふに、さまざまにかひなく聞えむも、いといとほしければ

(『狭衣物語』卷三／日本古典全書一・下・P38)

・人の聞かぬところにて、「いかに。御消息はありや」と、ゆかしげに問ひ給ふも、心苦しうあはれにて

(『浜松中納言物語』卷二／日本古典文学大系・P221)

・「さて、いかがおはします。アあまたさぶらふや」と問ひ給へど、はかばかしき人しなれば、おほほれてのみこそあれ。
(同卷四／同・P335)

これらの例はすべて、人物または物の存否に関する相手への問いかけであつて、「や」は例外なく疑問の用法である。したがつて、傍線部①を忠実に解釈しようとするれば、「出しぬげに、急に、殿——夫の君がお出でなのですよ」(『全註解』・口訳)、「急に殿がおいでになりましたよ」(『対照』・現代語訳)等々諸注の訳はみな誤りとせざるをえず、正し

くは、侍女が「女」に「急に旦那様がいらつしやいますか」と尋ねたと考えるよりほかにないだろう。が、これではどうい話を通じない。だとすればこの「や」、一度は疑つてみるべきではあるまいか。

そこで、アイデアが三つ。すなわち、(a)仮名「や」はその字母でもある漢字「也」からの転訛で、原形は伝聞・推定の助動詞「なり」である。(b)仮名「や」は同じく漢字「也」の誤りで、原形は断定の助動詞「なり」である。(c)「や」は、感動詞「や」の「ゝ」が脱落した転訛本文である、の三とおりの仮説がそれだ。「や」と「也」との交替および繰り返し符号「ゝ」の脱落ともに、実際にめづらしくない現象だといってよいので、誤写の想定そのものにむりはなからう。あとは道理が通るかどうかが、まず(a)説の場合は、上の「入り来るを見て」と矛盾を来すことになる。「見て」ならば「おはすめり」とありたいところ。また(b)説の場合は、「おはす」との接続に問題を残す。サ変動詞「おはす」+断定の助動詞「なり」であれば、「おはするなり」となるのが当然だからだ。もつとも、この「おはす」に「誤用」を認めて四段活用と考えるか、あるいは、「なり」の上に「る」一字を補つてやるならば話は自ずから別だけれど。そして(c)説の場合は、「やや」という感動詞が、その性格上一般に発話の冒頭ないしは単独で用いられることが圧倒的に多い点が気になる。ただ、「あれ見せよ。やや、母」(三巻本「枕草子」)「人ばえするもの」の段／新日本古典文学大系・P196)といった例もあるので、三説の中でもつとも難が少ないといえようか。ゆえにここでは、ひとまず最後の(c)説を採用して、このあたりの本文を、

◎女、「にはかに殿おはす。やや」といへば、うちとけてゐたりけるほどに、心さわぎて

と整理し、折しも「うちとけてゐた」主人の「女」に向かつて、侍女が「急に旦那様がおいでです。もしもし」とあわてて呼びかけたものとみておきたい。

つづいて、傍線部②の「きしつくる」。この箇所については従来、大別して次の三種の解釈があった。

A II「なすりつけていると」（『評釈』・通釈）、「こすりつけてゐるうちに」（『全書』・頭註）、「顔になすりつける間に」（『集成』・傍注）など、「女」が掃墨を顔にこすりつける意に解する立場。

B II「きしつくる」を事実上「着せつける」とみなし、「顔にお白粉を着せるように附ける。おおいかおせるようにお白粉をつける」意に解する立場（『全註解』）、また、「きしつくる」を「着仕付く」と考え、「身づくろいしている」との意に解する立場（『全訳注』）。

C II「きしつくる」の「きし」を「岸」と解し、「立ち留まらねばならぬ一線を「岸」とみて、「岸は尽きても」その先へという気持で「簾をかきあげて」へかけて、「波ならばここで立ち帰るはずの岸辺まではいりにはいつた男は」の意に解する立場（『全集』／＼『完訳』）。

これら三者のうち、B・Cはいわば異端の説であり、Aが通説の位置を占めている。B・C両説がともにきわめて不自然な語や表現を前提とする奇矯な解釈であつてみれば、消去法的に通説を支持しておくのが無難な処世術なのだろうが、そのA説にしたところで、「不詳。きし」は「きし／＼」「きしむ」（中略）などの「きし」で、きしきしいうほどつよくこすりつける意か（『全訳』・注）、「きしきしとこすりつける意かというがはつきりしない」（『対照』・

脚注) というのが実情であつて、根拠はなほだ薄弱なのだ。A説に立つ注釈書の中には、異文の「さしつくる」を採用するものもあるが(『新註』／『新講』／上田『新釈』／佐伯・藤森『新釈』)、たとえ「さしつくる」の本文に拠つてみたところで、この語が文脈に適合しない、つまり「こすりつける」等の意味にはならない点で同じことなのである。従来の諸説にはとてもしたがえない。となれば、他にどのような解決策があるのだろうか。——そこで、ズバリという。「さしつくる」は「すみつくる」の誤写ではないのか、と。傍線部②の前後には、「白きものをつくる」「まだらにおよび形につけて」と、二度にわたつて「つく」という動詞が用いられており、いずれも「女」が白粉(実は掃墨)を顔に塗りつける動作を表している。とすれば、「さしつくる」の「つくる」もそれらと同様の用法だとまずは考えなければならぬ。そうすると、「さし」は「つくる」の目的語で、「女」は「さし」を塗りつけたことになるのだから、残る課題は「さし」がどのような本文からの転訛なのかということに絞られる。と、ここまできればあとは簡単だ。「女」は白粉と思ひこんでがむしゃらに「掃墨」を顔に塗りたくつていたわけだから、答えは「墨」以外にないだろう。「すみ(寸三)」「さし(支之)」の誤写はじゅうぶん想定可能だ。「さしつくる」の正体はこのとおり「すみ(墨)つくる」だったのである。

なお、本文をこうしたかたちに改訂することによつて、『はいずみ』の典拠のひとつである平中墨塗り譚との関わりが、さらに密接なものとなるだろう。なぜなら、現存する『古本説話集』所載のそれには見えないものの、『源氏釈』以下、『奥入』『紫明抄』『河海抄』といった『源氏物語』の古注釈が今日に伝える平中の妻の歌(文献によつて語句に多少の異同があるが、今は『釈』のものを引用する)。

・われにこそつらさを君が見すれども人にすみつく顔のけしきは

と、用語の面で一段と強固に結びつくことになるからである。そしてこのことは、「すみ」に「住み」と「墨」との両義性を認めて一篇の解析を試みた、米田新子「人に『すみつく』かほのけしきは」——平中の妻と『はいずみ』の女——（『国文学攷』第四百二十二号、平六・四）の考察をもより興味深いものにするかもしれない。